

秋芳洞と秋吉台

鍾乳洞というのは、あまり観光地といった感じもしないし、「よし！～の鍾乳洞に行こう！」っていうノリにもあまりならないと思う。私は生まれてこのかた、鍾乳洞に入ったことが無かった。正直な話、鍾乳洞というものに、そんなに興味もなかった。暗いトンネルみたいな場所に時



間やお金を使って行こうという気になれなかったのである。たしか東京都内でも、多摩あたりに日原鍾乳洞とかいう場所があると聞いてもいたが、そこですら行く気がしなかった。だから今回、山陽の海岸線をずっと旅行しているのに、わざわざ寄り道までして、この秋芳洞に行くと言われた時、正直、意味が分からなかった。というより、そもそもこの一連の旅行というのは、写真を撮りに行くというのが大きな目的でもあったので、カメラを持って鍾乳洞に入るという事自体が、ある意味で無謀である。結論から言って、ほとんどの写真のピントが外れていて、使いものにならないも同然の写真ばかりである。それでも、私にとっての初めての鍾乳洞体験であり、無謀ながらも、カメラ片手に一生懸命に写真も撮ったので、どうか読んでほしい。

まず秋芳洞という名称の読み方であるが、正しい読み方は「あきよしどう」である。実際、我々も、車で秋芳洞へ向かうとき、カーナビに「しゅうほうどう」と打って、なかなかヒットしなかったのを思い出した。どうやら、地元の間でも「しゅうほうどう」と呼ぶ人間は多いとのこと。それゆえ 1955 年に秋吉村を含む 4 箇村が合併した時、町名が「秋芳町(しゅうほうちょう)」となったぐらいである。しかし、1963 年に山口国体が開催される事になり、多数の観光客の来訪を予期した事から、宮内庁に正式な呼び方を確認したところ、正式な読み方は「あきよしどう」で間違いないとなったみたいである。それでも、山口県内のあちらこちらで秋芳洞の話を持ち出してみても、ほとんどの山口県民が「しゅうほうどう」と言っていたので、もうどっちでも良いのだと思う。

当たり前ではあるが、秋芳洞は山の中にある。私は秋芳洞なんて聞いたこともなかったので、そんなに観光地って感じでもないのかと思っていたが、現地に着くと結構な数の車

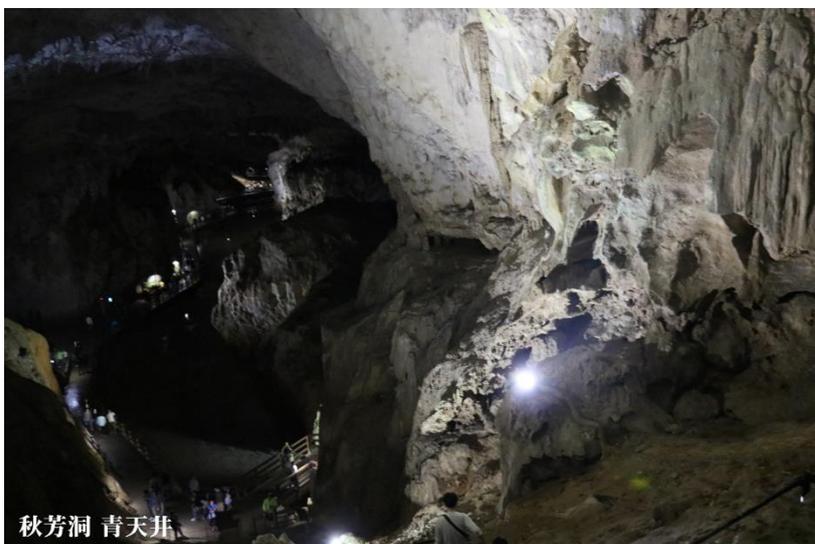
が駐車してあったので、びっくりした。前もってきちんと旅行の計画を立てている人達は目の付け所が違うのかもしれない。

入場券を購入して、洞窟へ向かう。洞窟の入り口が見えてくる。洞窟の中からは、異様なまでに青々とした水が流れ出ており、神秘的な場所に来てしまったという感じがしないでもない。水の上には橋が架けられており、洞窟の中へと道が続いていく。暗い洞窟の中を歩いていくのだから、てっきり足腰のしっかりとした人間ばかりなのかと思いきや、老若男女問わず、たくさんの観光客がいたので、びっくりした。実際洞窟の中を進んで行っても、ほとんど階段もないし、道も結構広く、普通に誰でも見学する事は可能である。

洞窟に入ってすぐに現れるのが「青天井」と書かれた看板である。人が結構並んでいたの、後ろに並んで順番を待ってみる。やっと順番がきたと思ったら、見物するのに 500 円がかかるとのこと。500 円を払うと、懐中電灯を持たされる。どんな所なのかと思いきや、今度は金具の打ち込められた岩をボルタリングみたいに登らされるのである。片手に懐中電灯、もう片手には大きいカメラを持っているのだから冗談じゃない。腕にそれらを絡ませ、結構体力を使って登って行く。前も後ろも人がずっと続いているのである。頂上に着いたら着いたで、今度は足の踏み場が少ない岩の上を歩いていく、岩の上は濡れているので、結構滑るのである。一列になって、みんなで一生懸命前に進んでいく。この先に「青天井」というものが見られるのだと、期待に胸を膨らませて、前へ進む。着いた！何もない！ただただ洞窟の入口から入って歩いてきた道のりを上から眺めるといっただけの感じである。もう本当にガッカリだ。結構体力も使ったのに。どうやら、「青天井」というのは、洞窟の入り口から差し込む外光が洞内を流れる川に反射して、天井が青く見えるという現象の事をいうみたいだが、私が行った時はタイミングが悪かったらしい。まあ、そういう時もあると思う。頑張って登ってきたという証拠に、写真だけでもと思い、撮ってはみたものの、案

の定、ブレブレで変な写真ばかりである。仕方ない。

他にも、印象深かったのが百枚皿。名前の通り、お皿のような形をした岩をいっぱい見ることが出来る。段丘の中腹から流れ出る水が、波紋の形に固まったものであ



秋芳洞 青天井



秋芳洞 百枚皿

る。多くの皿が並べられたような形をしていることから、この「百枚皿」という名前が付けられたわけであるが、実際には100どころか500以上はあるとのこと。水の波紋の端の泡立つ部分に石灰分が沈積して、波紋の淵の部分が、長い歳月の間に盛り上がり、皿状になったと言われている。

それ以外にも、ツララのように垂れ下がった鍾乳石も見られる。これは「傘づくし」と呼ばれており、昔の傘屋の天井にぶら下げられた傘の様に見えることからこう名付けられた。本物のツララを見ると、「溶けて、落っこちてきて頭に刺さったら怖いな」とか考えてしまい、その下を歩く事を躊躇してしまうが、この傘づくしだったら、まず落っこちてくる心配はないので、安心して下から見上げることだってできる。

とてつもないインパクトがあるのが、^{こがねばしら}黄金柱。天井近くの岩の隙間から流れ出た地下水が作り出したものである。表面に模様みたいなものがはいつており、まるで天井から大きなカーテンが垂れ下がっているような姿は、秋芳洞のシンボルともいわれている。

確かに、言ってしまうえば全部ただの岩ではあるが、こうして特徴的な形をした岩それぞれに名前が付けられているというのは、なかなか面白い。

秋芳洞を見学し終えて、次は秋吉台へとむかう。なんだか似たような名前なので、こんがらがりそうにもなるが、

秋吉台というのは、山口県美祢市中・東部に広がるカルスト台地で、その総面積は54㎏にも及び、日本最大のものである。カルスト台地というのは石灰岩などの水に溶解しやすい岩石で構成された大地が雨水、地表水、土壌水、地下水などによって



秋芳洞 傘づくし

浸食されてできた地形のことである。この秋吉台は特別天然記念物ならびに国立公園にもなっている。とは言ったものの、実際に行ってきた感想としては、広大な緑の野原に白い岩みたいのがポツンポツンとあるだけ



秋芳洞 黄金柱

で、たいしたことはない。ただ何処までも果てしなく緑であり、どうやらその地下には前述した秋芳洞をはじめ、大正洞、景清洞、中尾洞など 400 以上の鍾乳洞が広がっているとのこと。自然公園法に基づき、国立公園に準じる景勝地として、環境大臣が指定した国立公園であるとのこと。端的にいうと公園というよりは野原といった感じがする。延々と広がる野原の上に車道が1本だけ続いていくといった感じだろうか。あくまで私個人の感想だが、特に何もないので、秋芳洞に行くついでに、もし時間があれば行かれたらどうだろうか。

そういえば、秋吉台を見学し終えた後、宇部へと向かった。宇部は日本大手の総合化学メーカーである宇部興産の拠点でもある。秋吉台がある美祢市からこの宇部市まで、宇部興産が自らのために開拓した専用の私道があったみたいなのである。山口の湾岸工業都市宇部と内陸都市美祢の間約 31.94km を結ぶ日本最長の私道で、その名も『宇部興産 宇部・美祢高速道路』。伊佐石灰石鉱山で発掘した石灰石と、伊佐セメント工場でつくったセメントの半製品クリンカーを専用のトレーラーで運搬しているみたいである。もともとは国鉄



秋吉台

美祢線の貨物列車を利用して来たとのことではあるが、昭和の中期から後期にかけて貨物の運賃値上げやストの頻発により、効率化と安定化の必要に迫られた結果として建設されたという経緯がある。実際に行っているときは、そんな事知る由もなかったが、こうやって聞



くとなんだかすごい話である。いくら大手でも、ここまでの事をする会社というのは聞いた事がない。さすがである。

本来は、山陽の海岸線を巡っていくというルートではあったものの、何故か寄り道といった形で訪れることになった美祢市。何が印象的だったかと聞かれても、正直、返答に困

ってしまうといった感じではある。美祢市のホームページを見てみても、市のキャッチコピーが「交流拠点都市」と書いてあるぐらいである。これという目玉がなくとも、前述したような工業都市との関りがあるし、梨やゴボウ、ホウレンソウといった農業も盛んであるとのことなので、山口県内でもそれなりの存在感を放っているようには感じられる。正直、観光に関しては、私はそこまで感動しなかったので、鍾乳洞巡りとかが、よっぽど好きな人は訪れてみてもいいかもしれない。

ウェバー伊安